

紀要

縄文時代～古墳時代前期の集団規模の推移

－琵琶湖周辺地域における先史社会の展開過程に関する覚書（1）－

.....瀬口 眞司（1）

近江地域における古代東北系土器の新例

－守山市・横江遺跡・大門遺跡出土事例を中心にして－辻川 哲朗（13）

古代道路名称考

－阿須波道の名称由来について内田 保之（24）

塩津港遺跡出土の船形模型と琵琶湖の伝統的木造船

.....横田 洋三（35）

比良山系の山寺（3）

－高島市太山寺遺跡について－小林 裕季（40）

滋賀県とその周辺における石臼の産地に関する一考察

－彦根市妙楽寺遺跡出土の石臼を中心として－加藤 達夫（44）

28

滋賀県とその周辺における石臼の産地に関する一考察

—彦根市妙楽寺遺跡出土の石臼を中心として—

加 藤 達 夫

1. はじめに

石臼は、円筒形の石を上下に重ね、主として手で回転させ、上下の臼の接触面で対象を粉碎する器具である。このしくみをもつ石臼には、製粉する対象の違いにより、茶臼と石臼がある。両者は、素材となる石材・構造が異なり、本論で対象とするのは後者の石臼である。

このような形態の石臼は、日本では鎌倉時代中期には現れ、地域により差はあるものの、15世紀から16世紀にかけて各地に拡散し、食生活を大きく変えたと考えられている（桐山2013）。地域毎に、石臼に適する石材が選択され製作されており、多様な形態の石臼が生産された。

滋賀県内では16世紀後半には、城館などに石臼が普及していた。滋賀県およびその近隣にもいくつかの産地があることが知られており、滋賀県米原市伊吹町曲谷は代表的な産地のひとつである。曲谷産の石臼は、素材とする岩石の特徴や形態の特徴がとらえられている。このほかの産地については、どのような石材で、どのような形態の石臼が生産されていたのかは不明な点が多い。素材となる岩石には、

花崗岩が多く使われている中で、少数ながら花崗斑岩と思われる石材も使われている。

筆者は、滋賀県彦根市に所在する妙楽寺遺跡出土の石臼を実見する機会に恵まれた。その中に、花崗岩製の石臼に混じり、異なる種類の石材の石臼をみいだした。これらの資料は未報告であったことから、実測調査をおこなった。よって本稿の目的は、未報告の資料を紹介するとともに、肉眼観察により石材の種類を同定し、石材別に形態の違いを検討し、その産地について考察することにある。

2. 滋賀県の石臼の産地に関する先行研究（図1～4）

記述の前提 次に、当該地域の石臼とその生産地に関する論説について記述したいが、石臼に関する基本的な前提について、説明しておきたい（図1～3）。

石臼の各部位の名称を図1に示す。石臼は、「上臼」と「下臼」を組み合わせる。上臼には、動力を伝える「挽き木」が取り付けられる。2種類の取り付け方法があり、ひとつは、側面の穴に挽き木を打ち込む「横打ち込み式」、

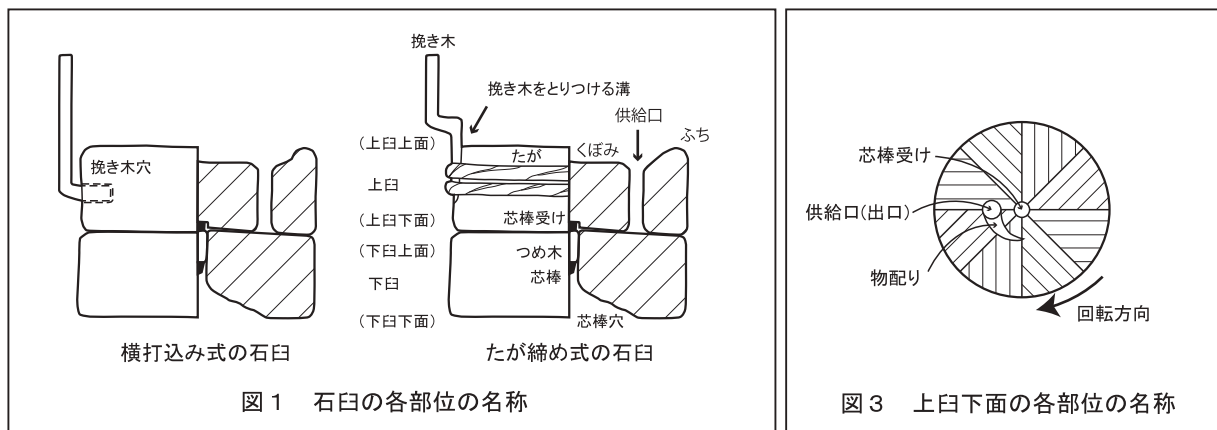


図1 石臼の各部位の名称

図3 上臼下面の各部位の名称

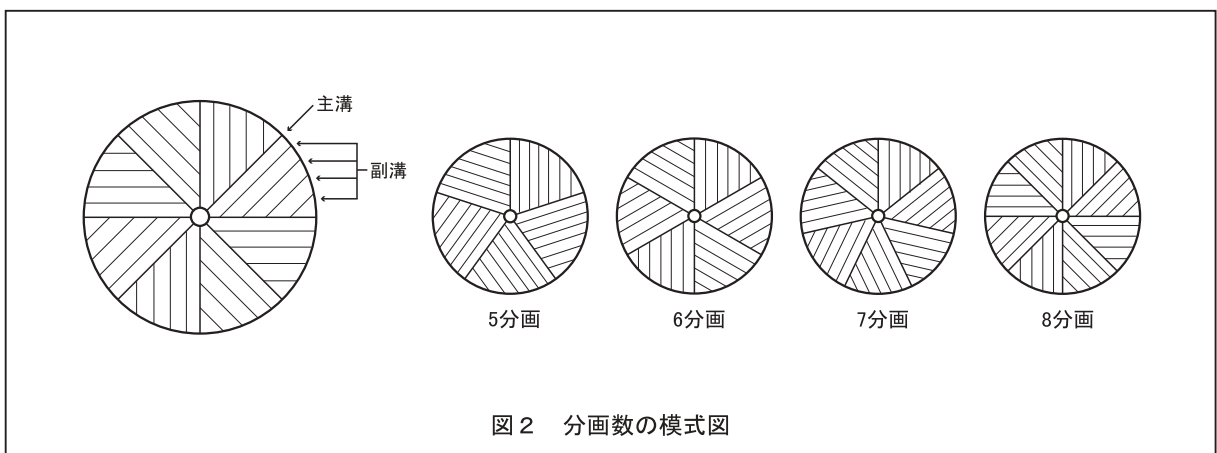


図2 分画数の模式図

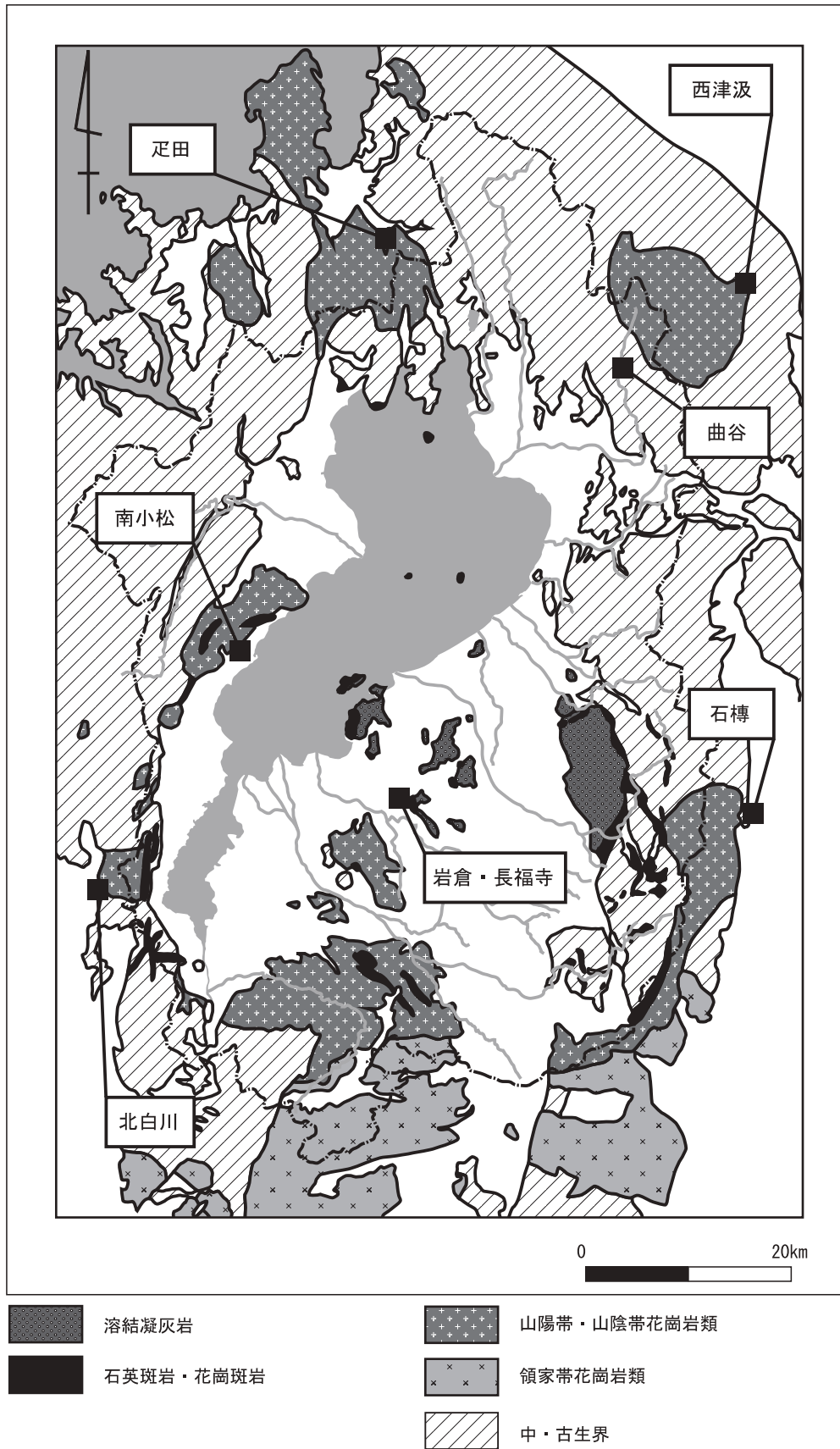


図4 滋賀県の地質と石臼生産地

もうひとつは、側面に溝を彫りたがを締めた後に挽き木を楔のように打ち込む「たが締め式」である。上臼にはその他に、上面の「くぼみ」、すりつぶす対象を接触面に供給する「供給口」、回転の中心となる「芯棒」を受ける「芯棒受け」が彫られる。下臼には、中心に芯棒を差し込む「芯棒穴」が彫りこまれ、「つめ木」を介して芯棒が固定される。

上臼下面と下臼上面には、溝が彫られる。彫られる溝のパターンを分画と呼ぶ。分画の模式図を図2に示す。溝は中心から外に向かい放射状に彫られ、これを「主溝」とよぶ。主溝に並行して彫られる溝を「副溝」とよぶ。その他に、上臼の下面の各部位の名称を図3に示す。「物配り」は供給口の出口から、接触面に対象をスムーズに供給するための構造である。

石臼産地の位置 かつては県内およびその周辺に、複数の石臼産地があったことが知られている（伊吹町教育委員会1994）。曲谷（滋賀県米原市伊吹町曲谷）、石樽（三重県いなべ市大安町）、岩倉・長福寺（滋賀県近江八幡市）、北白川（京都府京都市）、越前（福井県福井市）、疋田（福井県敦賀市疋田）、西津汲（岐阜県揖斐郡揖斐川町）、南小松（滋賀県大津市南小松）の7カ所である（図4）。

図4から、琵琶湖をとりまく山地には、花崗岩の岩体が分布していること、各生産地はそれらの岩体縁辺部に位置していることがわかり、石材として花崗岩を好んだことが読みとれる。たしかに、曲谷・石樽・北白川・疋田・西津汲、南小松では花崗岩を利用して、石臼を生産していたとされている（伊吹町教育委員会1994）。一方、岩倉・長福寺の生産地のみ、湖東平野の小山地縁辺に位置している。この小山地は、花崗斑岩と溶結凝灰岩からなり、他の産地とは得られる石材が異なる点に留意しておきたい⁽¹⁾。

三輪茂雄氏の論説 これらの産地で生産される石臼の形態については、三輪茂雄氏が全国規模でおこなった調査が詳しい（三輪1994）。

氏は、分画の数・挽き手の取り付け方法に注目している。全国の上臼には、5・6・7・8の分画があり（図3）、そのうち6および8分画が大半で、滋賀県の上臼は8分画が主であるとしている。さらに、挽き木の取り付け方法には、横打ち込み式のほかに、たが締め式の石臼があることをみいだした。たが締め式は、愛知県・岐阜県・三重県・滋賀県・京都府に分布するとし、分布の特徴から、その起源が鈴鹿山系に点在する生産地であると推定している（三輪1994）。曲谷・石樽の上臼についてもこの挽き木の取り付け方法がとられている（三輪1994、伊吹町教育委員会1994）。

つまり、滋賀県に分布する上臼は①概ね磨面を8分画に分割し、②挽き手の取り付け方法はたが締め式をもちいる、という2つの特徴を共有しているようである。

曲谷産の上臼については、三輪氏により形態の特徴がと

らえられている。その特徴は、以下の7点である。①石材は花崗岩で、石質は細かい黒雲母が長くつらなる配列がある。②上臼上面のくぼみが浅い皿状をなす。③供給口は長方形で、入口に向かって漏斗状に傾斜している。④上・下臼の直径は一尺二寸（36cm）前後。⑤高さは二・五寸～三・五寸（7.5cm～10.5cm）。⑥たが締め挽き木を取り付ける溝がある。⑦8分画で回転方向は反時計回り。

これらの特徴については、曲谷の生産地跡で出土した失敗品と、集落に保管されていた上臼を調査した高橋順之氏も追認している（伊吹町教育委員会1994）。

高橋順之氏の論説 さらに、高橋氏は遺跡から出土した上臼の形態を検討し、曲谷産の上臼の特徴をそなえる上臼が存在することを明らかにするとともに、先述の特徴を備えた上臼は16世紀の後半には既に存在し、滋賀県内や岐阜県に供給されていたとしている（伊吹町教育委員会1994）。

近年、曲谷では石切り場跡の調査が進められ、集落内を流れる姉川の上流部に複数の採石地が発見されている。これらの採石地では、矢穴・矢穴痕などの採石の痕跡と共に、上臼の制作に関する遺構である岩屋も検出されている（菱田・野田2013、高橋2014）。曲谷の産地は・採石・粗加工・細加工・供給先が調査されている稀有な事例である。

國分政子氏の論説 これらの研究に続いて、國分氏は滋賀県内出土の中世後半の遺跡から出土した上臼と茶臼を集成し、供給口の形態によって分類したうえで、各類別の分布傾向をあきらかにした。上臼（Ⅰ類）、茶臼（Ⅱ類）に大別し、さらに供給口が長方形のa類と楕円形のb類に細別している。Ⅰa類は県北東部に分布が偏り、Ⅰb類は県東南部に分布が偏るとしている。上臼は、陶磁器などにくらべ分布圏が狭く、地域ごとにその形に特徴があることから考えると、示唆に富んだ結果である。また氏は、野洲市中主町吉地大寺遺跡出土の上臼の石材が、花崗斑岩に類似するという点に注目し、石材の違いが産地を見分ける鍵になりうる可能性を指摘している（國分1997）。

課題の所在 これらの研究結果をふまえると、曲谷の産地を除き、滋賀県内とその周辺に存在した産地での上臼に関する研究は始まったばかりであるといえる。それぞれの生産地で上臼に用いられた石材の種類や形態の特徴も不明な点が残っている。石材別に形態の違いを把握することは、産地について検討するための基礎作業でもある。

本論では、①妙楽寺遺跡出土の資料を実測調査し、石材の種類を同定したうえで、石材別に形態の特徴について比較検討した。さらに、②産地について考察するため、既報告の上臼との比較検討をおこなった。今回の比較対象は、曲谷および岩倉・長福寺である。この検討に、曲谷、岩倉・長福寺でおこなった踏査の結果を加えて、考察をおこないたい。

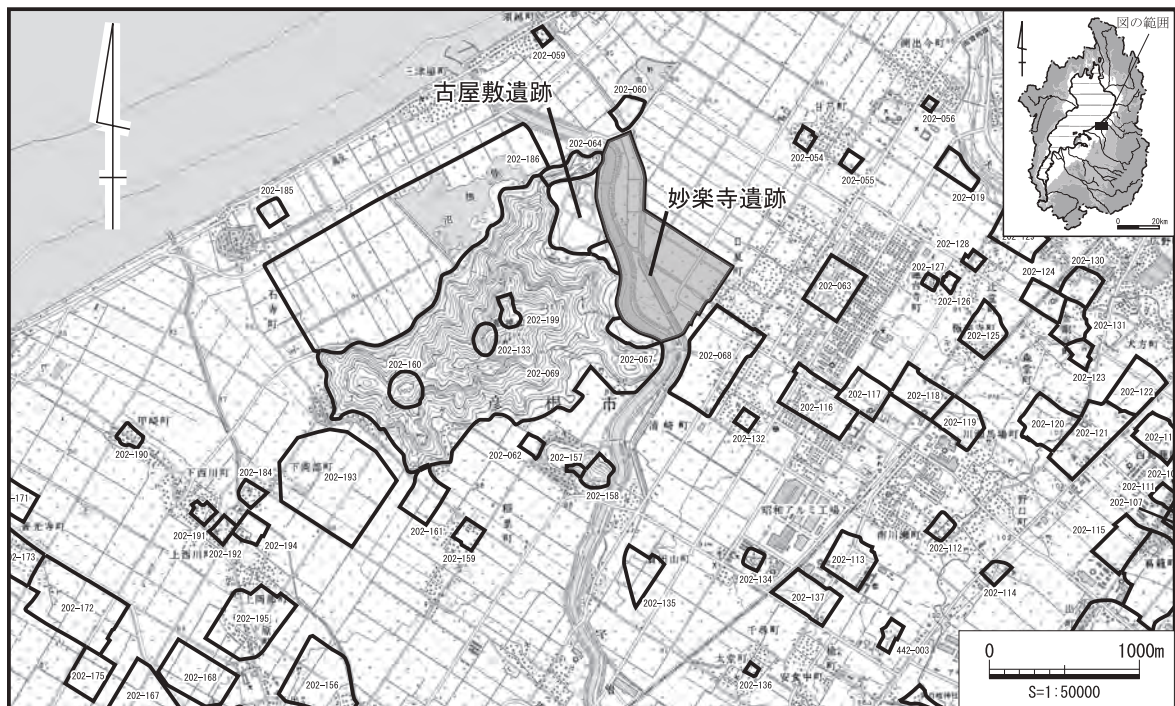


図5 妙楽寺遺跡の位置

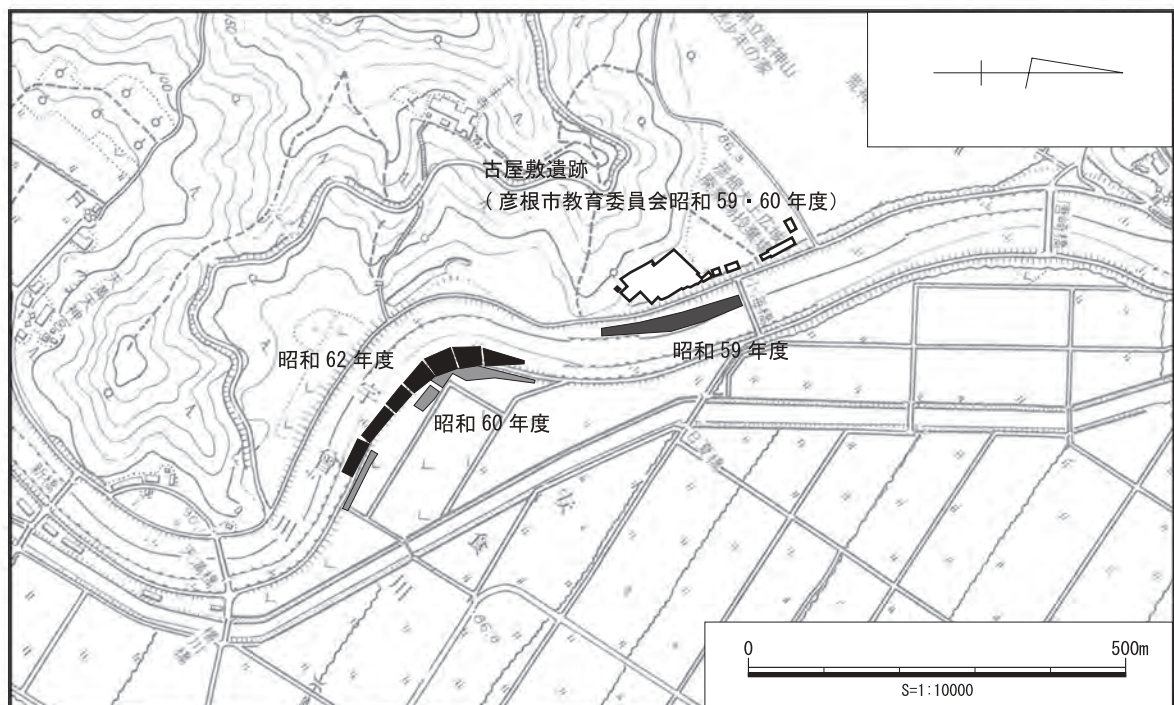


図6 調査区の配置図

3. 妙楽寺遺跡の概要（図5・6）

遺跡の位置 妙楽寺遺跡は、滋賀県彦根市日夏町に所在する（図5）。遺跡は荒神山の東麓に広がっており、現況の大半は農地である。荒神山は、白亜紀末から古第三紀初頭の火山活動により形成された火山岩が、長い年月をかけて浸食され、小山地として平野に取り残されたものである。荒神山の南には宇曾川が流れる。宇曾川は荒神山に突き当たり流れを変え遺跡内を流れ、琵琶湖に注いでいる。宇曾川の運ぶ土砂は扇状地を形成したが、荒神山が存在することにより土砂の堆積が遅れた部分には、曾根沼や野田沼などの内湖が形成された。曾根沼は、干拓によりその規模を縮小し現在の形となっている。現在も大小さまざまな水路が縦横に走り水郷の景観を形成している。

調査の経過 遺跡は、宇曾川により形成された扇状地の末端に立地している。宇曾川は、たびたび水害をおこしており、妙楽寺遺跡の調査は、宇曾川の災害復旧河川改修工事に伴うものであった。調査は、1次（昭和59年度）、2次（昭和60年度）、3次（昭和62年度）にわたりおこなわれた（図6、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1986a、1986b、1989）。なお、関連する遺跡として、彦根市教育委員会により、昭和59・60年度に古屋敷遺跡の調査がおこなわれている（図6、彦根市教育委員会1987）。

遺跡の時期 調査の結果、妙楽寺遺跡は、大きく5時期の遺構・遺物が確認されている。Ⅰ期は弥生時代から古墳時

代前期（B.C. 2世紀～4世紀）、Ⅱ期は古墳時代中期から平安時代（5世紀～12世紀前半）、Ⅲ期は平安時代末から鎌倉時代（12世紀後半～14世紀前半）、Ⅳ期は、Ⅳa期とⅣb期に細分され、Ⅳa期は室町時代中期（15世紀）、Ⅳb期は室町時代後期（瀬戸美濃窯大窯編年Ⅰ・Ⅱ期に相当し、1490年から1570年の年代）、Ⅴ期は室町時代末（瀬戸美濃窯大窯編年Ⅲ期に相当し、1570年から1584年の年代）とされている。

対象資料の所属時期 今回資料として用いた石臼のうち、遺構出土例は、全てⅣb期に属する。Ⅳb期の妙楽寺遺跡は、犬上郡条里に沿って溝や道路が整備され整然とした地方都市であり、続くⅤ期にはⅣb期の遺構を踏襲しつつ規模を縮小し、16世紀末に都市機能は完全に停止し農地となっていたとされている（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1989）。そして、Ⅳb期の遺構は、すくなくとも16世紀末までに埋没したと考えられる。また、資料は全て破損しており、完形のものはなかった、このことから15世紀末から16世紀末にかけて遺構に廃棄された石臼と考えられる。また、出土遺構・層位を確認できなかった資料に関しても、概ねこの時期に所属すると考えた。

4. 出土した石臼（図7～10）

対象資料について 妙楽寺遺跡の調査報告書で、石臼が報告されているのは、昭和60年度の2次調査と、昭和62年

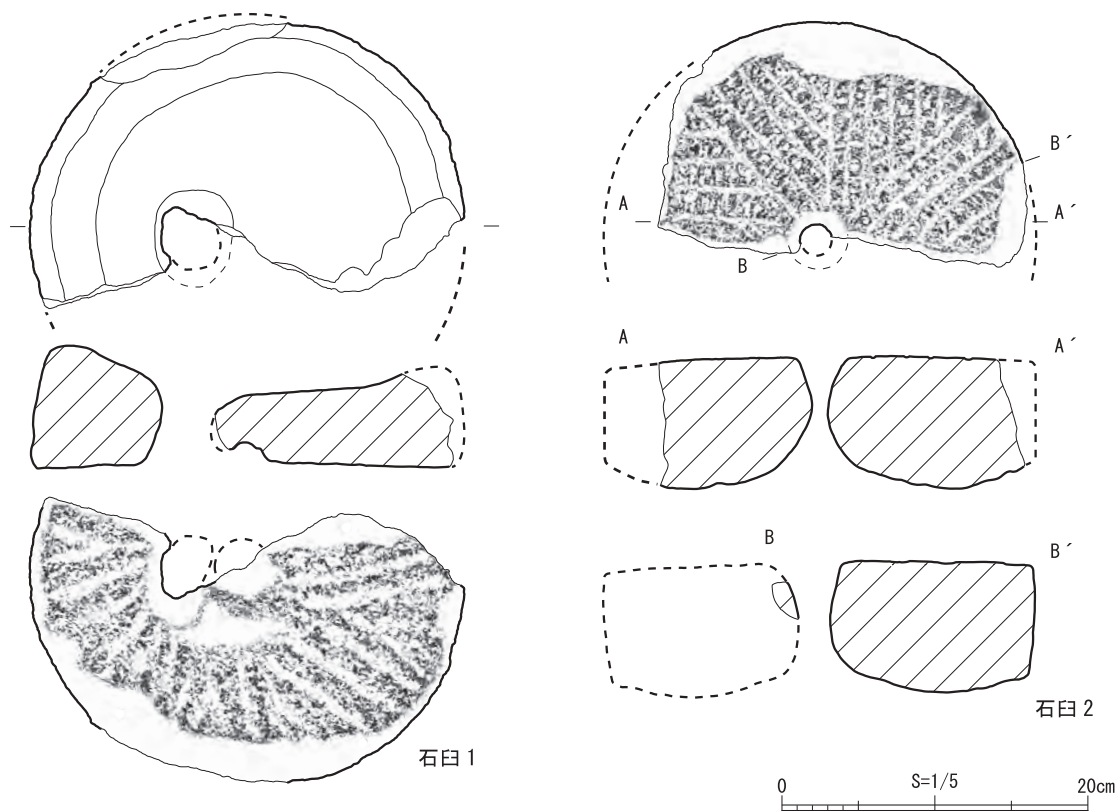


図7 妙楽寺遺跡出土の石臼

度の3次調査である。このうち、3次調査の7点が図化されている。本稿では、既報告の5点を再実測するとともに、未図化の9点について実測調査をおこない、検討の材料とした。なお既報告の資料については、報告書の挿図番号を記載した。石材の同定は、肉眼観察により、色調の記載は、『新版標準土色帖2010年版』によった⁽²⁾。

石臼1 上臼で、全体の約1/2程度が残存する。復元直径は28.4cmで、高さは6.5から8.0cmと不均一で傾いている。重さは5.45kgを計る。供給口が一部残存し、その形態は楕円形である。

下面の分画数は溝の配置が乱れるが8分画と推定され、副溝の数は6～7本である。芯棒受けが一部残存し、その直径は約3.6cmと推定される。深さは1.2cmを計る。芯棒受けの中央は、芯棒による磨滅の痕跡が残りにくぼんでいる。物配りも残存し、長さは5.4cmを計る。

ふちは平らで、その幅は2.9cmを計り、磨かれてなめらかである。くぼみは浅い皿形で、ふちから残存している底までの深さは3.2cmである。くぼみ内面の磨きはない。側面の挽き木を取り付ける部分は失われている。

石材には、10.0mm以下の長石、9.0mm以下の石英の結晶が認められた。有色鉱物は、肉眼ではほとんど認められなかった。鉱物と石基の境界は明瞭に分かれ、斑状組織を形成している。以上のことから、石材は石英斑岩であると考えられる。石基の色調は黄褐色(2.5Y5/3)で、硬質である。

石臼2 下臼で、全体の約1/2程度が残存する。復元直径は28.3cmで、高さは8.5cmである。重さは5.55kgを計る。芯棒穴が一部残存し、上面から下面まで貫通している。上面での芯棒穴の直径は3.5cmで、上面から3.7cm下がった部分で直径が2.0cmと最も狭くなる。最も狭い部分から下は、挟まれ大きく広がる。下面の縁は大きく削り取られ丸くみをおびる。上面の分画数は8分画と推定され、副溝の数は5本である。

石材には、10.0mm以下の長石、9.0mm以下の石英、15.0mm以下の有色鉱物(暗オリーブ灰色[2.5GY3/1])が認められた。鉱物と石基の境界は明瞭に分かれ、斑状組織を形成している。以上のことから、石材は花崗斑岩と考えられる。石基の色調は、灰白色(5Y7/2)で硬質である。

石臼3 上臼で、全体の約1/2程度が残存する。復元直径は33.3cmで、高さは7.4から8.2cmと不均一で傾いている。重さは8.80kgを計る。供給口は失われている。

下面の分画数は8分画と推定され、副溝の数は4～6本である。芯棒受けが一部残存し、その形態は楕円形で、長軸は約8.5cm、短軸は約5.7cmと推定される。深さは2.4cmを計る。物配りが一部残存する。

ふちは平らで、その幅は2.3cmを計り、磨かれてなめらかである。くぼみは段のある浅い皿形で、ふちから残存している底までの深さは、3.4cmである。くぼみ内面は、磨

かれてなめらかである。側面には、挽き木を取り付ける溝が残存し、その幅は3.3cm、長さは7.4cm、深さは1.9cmを計る。

石材には、長石・石英が認められるが、鉱物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉱物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。色調は灰白色(5Y8/1)である。

石臼4 報告書の第75図-B510にあたる。IVb期の溝SD463から出土したものである。上臼で、全体の約1/2弱が残存する。復元直径は36.6cmで、高さは9.4cmである。重さは6.75kgを計る。供給口がわずかに残存し、その形態は楕円形と推定される。

下面の分画数は6分画と推定され、副溝の数は8本である。芯棒受け・物配りは失われている。

ふちは丸く、その幅は1.7cmを計り、磨かれてなめらかである。くぼみは浅い皿型で、ふちから残存している底までの深さは3.5cmである。くぼみ内面の磨きはない。側面の挽き木を取り付ける部分は失われている。

石材には、長石・石英が認められるが、鉱物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉱物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。有色鉱物はまばらに分布するが、一部密なところもある。色調は灰白色(5Y8/1)である。

石臼5 上臼で、全体の約1/4程度が残存する。復元直径は35.0cmで、高さは5.4cmである。重さは1.55kgを計る。供給口は失われている。

下面の分画数と副溝の数は、残存部分が少ないため不明である。芯棒受け・物配りは失われている。磨面の縁に幅3.1から5.1cmのノミ跡が連続して並んでいる。

ふちは丸く、その幅は2.4cmを計り、磨かれてなめらかである。くぼみは浅い皿型で、ふちから残存している底までの深さは3.2cmである。くぼみ内面の磨きはない。側面の挽き木を取り付ける部分は失われている。

石材には、長石・石英が認められるが、鉱物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉱物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。色調は灰白色(2.5Y8/1)である。

石臼6 上臼で、全体の約1/3強が残存する。復元直径は34.0cmで、高さは8.1cmである。重さは4.30kgを計る。供給口は失われている。

下面の分画数は8分画と推定され、副溝の数は4～5本である。芯棒受け・物配りは失われている。

ふちは平らで、幅は3.0cmを計り、磨かれてなめらかである。くぼみは浅い皿型で、ふちから残存している底まで

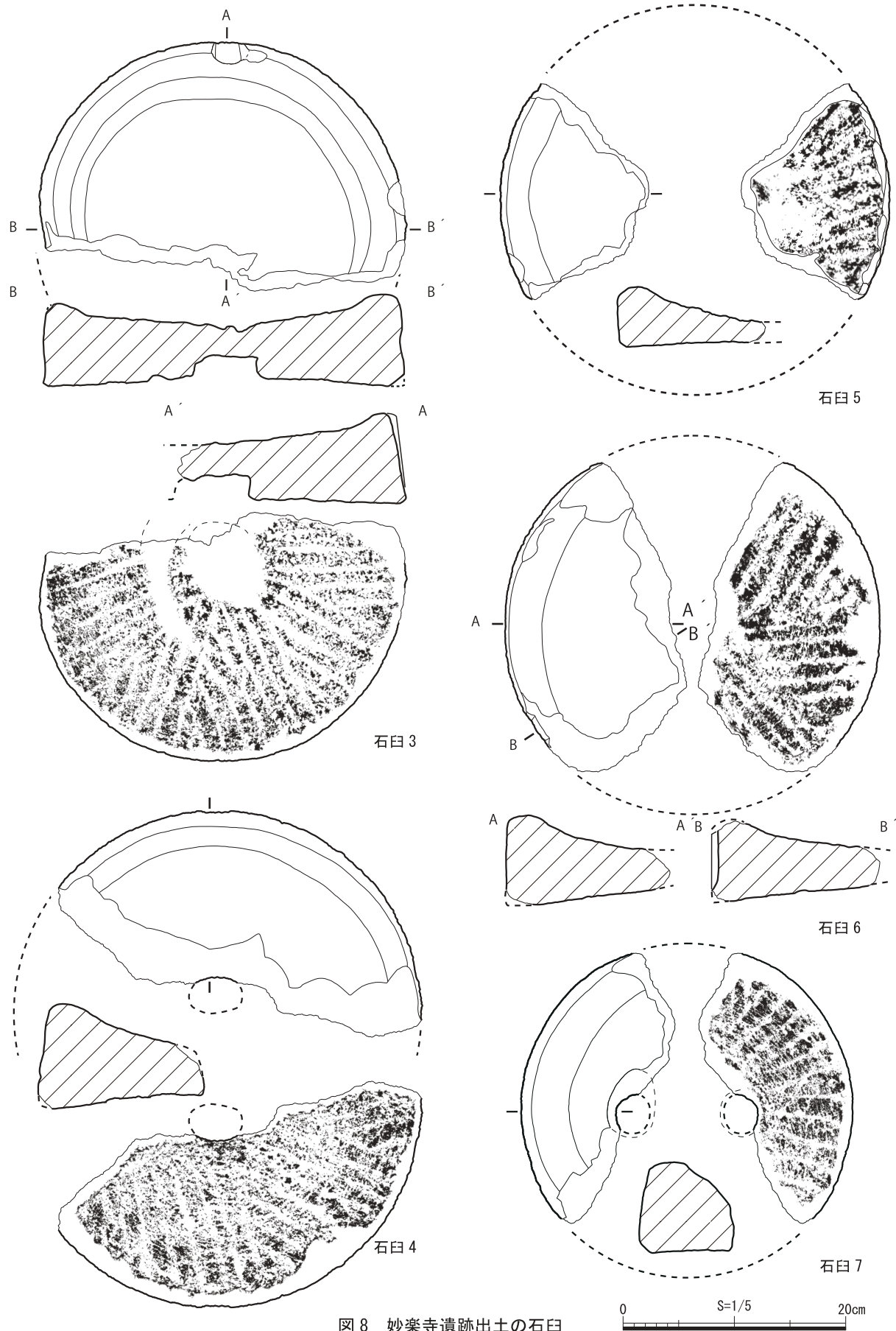


図8 妙楽寺遺跡出土の石臼

の深さは、3.0cmである。くぼみ内面は、磨かれてなめらかである。側面には、挽き木を取り付ける溝が残存しているし、その幅は3.9cm、長さは5.4cm、深さは0.5cmを計る。

石材には、長石・石英が認められるが、鉱物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉱物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。色調は灰白色（2.5Y8/2）である。

石臼7 報告書の第75図 - B528にあたる。IVb期の石組枘SX460からの出土である。上臼で、全体の約1/3程度が残存する。復元直径は30.0cmで、高さは8.1cmである。重さは3.00kgを計る。供給口が一部残存し、その形態は楕円形と考えられる。

下面の分画数は8分画と推定され、副溝の数は5本である。芯棒受け・物配りは失われている。

ふちは平らで、幅は3.4cmを計り、磨かれてなめらかである。くぼみは浅い皿型で、ふちから残存している底までの深さは、3.3cmである。くぼみ内面の磨きはない。側面の挽き木を取り付ける部分は失われている。

石材には長石・石英が認められるが、鉱物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉱物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。色調は灰白色（5Y8/1）である。

石臼8 上臼で、全体の約1/2程度が残存する。復元直径は36.5cmで、高さは11.2～12.3cmである。重さは10.15kgを計る。供給口が一部残存し、その形態は長方形と推定される。

下面の分画数、副溝の数は不明である。芯棒受け・物配り失われている。

ふちは平らで、その幅は2.4cmを計り、磨かれてなめらかである。くぼみは浅い皿型で、ふちから残存している底までの深さは、4.5cmである。くぼみ内面の磨きはない。側面の挽き木を取り付ける部分は失われている。

石材には、長石・石英が認められたが、鉱物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉱物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。色調は灰白色（2.5Y8/2）である。

石臼9 上臼で、全体の約1/2程度が残存する。復元直径は34.5cmで、高さは12.0cmである。重さは13.70kgを計る。供給口が一部残存し、その形態は長方形と推定される。

下面の分画数は8分画と推定され、副溝の数は6～7本である。芯棒受けが一部残存し、その直径は約4.6cmと推定される。深さは1.6cmを計る。物配りは失われている。

ふちは平らで、その幅は1.4cmを計り、磨きはない。くぼみは浅い皿型で、ふちから残存している底までの深さは、

2.7cmである。くぼみ内面の磨きはない。側面には、挽き木を取り付ける溝が残存しているし、その幅は3.6cm、長さは5.6cm、深さは1.0cmを計る。

石材には、長石・石英が認められるが、鉱物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉱物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。色調は灰白色（2.5Y8/2）である。

石臼10 報告書の第75図 - B204にあたる。包含層からの出土である。上臼で、全体の約1/2程度が残存する。復元直径は30.5cmで、高さは6.3～8.2cmである。重さは6.80kgを計る。供給口が一部残存し、その形態は楕円形と推定される。

下面の分画数は8分画、副溝の数は5～8本である。芯棒受けが一部残存し、その直径は約2.0cmと推定される。深さは1.0cmを計る。物配りが一部残存する。

ふちは平らで、その幅は2.5cmを計り、磨かれてなめらかである。くぼみは浅い皿型で、ふちから残存している底までの深さは、3.7cmである。くぼみ内面の磨きはない。側面の挽き木を取り付ける溝が残存し、その幅は4.5cm、長さは7.3cm、深さは0.6cmを計る。

石材には、長石・石英が認められたが、鉱物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉱物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。長石・石英はやや細かい。有色鉱物は密で量が多い。色調は灰白色（10YR8/1）である。

石臼11 下臼で、全体の約1/2程度が残存する。復元直径は29.3cmで、高さは8.8cmである。重さは5.95kgを計る。

芯棒穴が一部残存し、上面から下面まで貫通している。上面での芯棒穴の直径は不明で、上面から3.7cm下がった部分で直径が2.0cmと最も狭くなる。最も狭い部分から下は、挟られ大きく広がる。下面の縁は削り取られ断面は丸みをおびている。

上面の分画数、副溝の数は不明である。上面は中心に向かってわずかに傾斜する。

石材には、長石・石英が認められたが、鉱物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉱物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。色調は灰白色（2.5Y8/2）である。

石臼12 報告書の第74図 - B529にあたる。IVb期の石組枘SX464出土である。下臼で、3個の破片を石膏で接合しており、全体の約1/2程度が残存する。復元直径は30.8cmで、高さは6.5cmである。重さは石膏を含んで5.85kgを計る。芯棒穴が一部残存し、上面から下面まで貫通している。上面での芯棒穴の直径は5.0cmと推定され、上面から1.7cm下

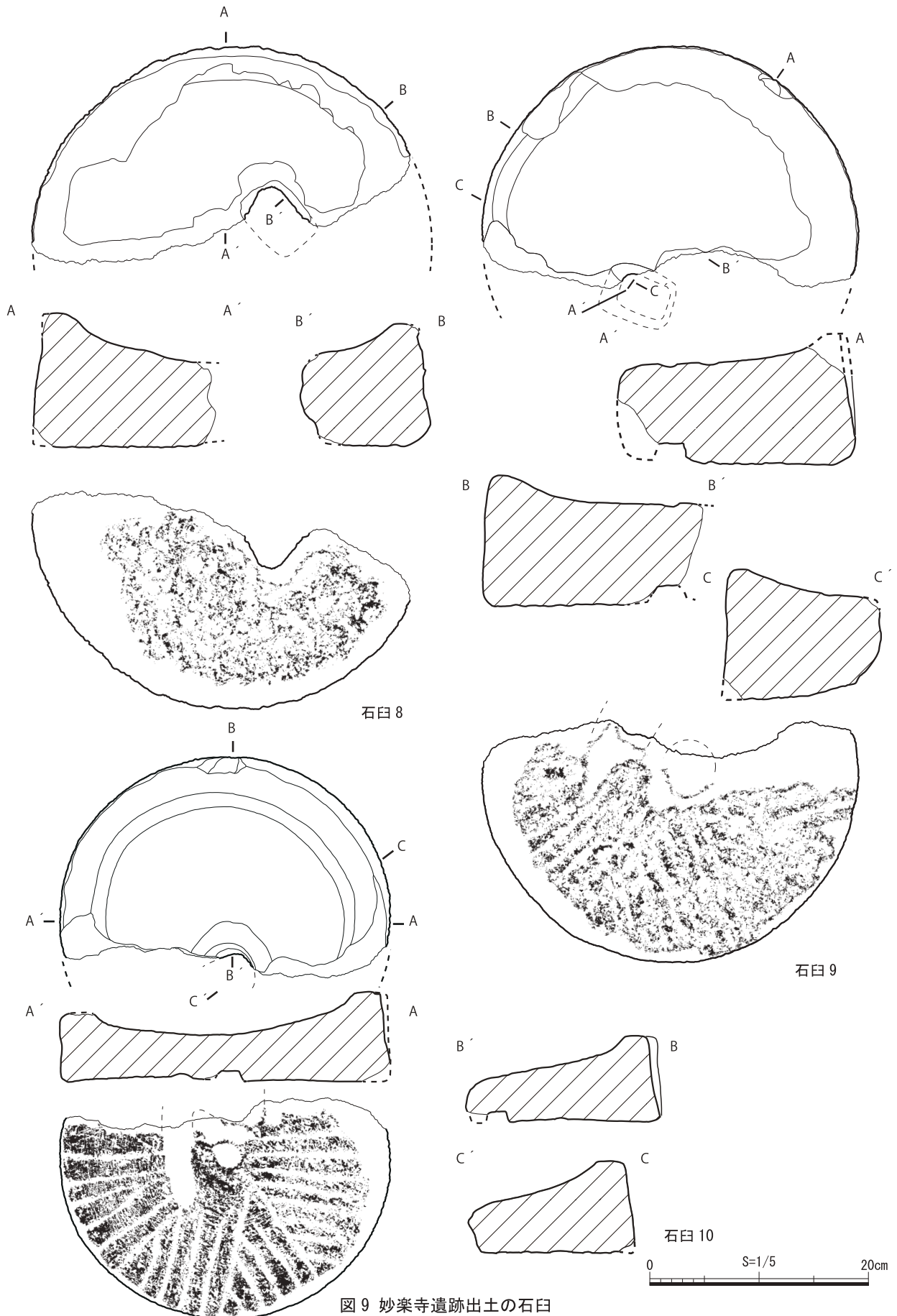


図9 妙楽寺遺跡出土の石臼

がった部分で直径が3.7cmと最も狭くなると推定される。最も狭い部分から下は、挟られ斜めに広がり、上面から5.0cm下がった部分で屈曲し緩やかに広がる。下面の縁は少し削り取られ、やや丸い角になる。

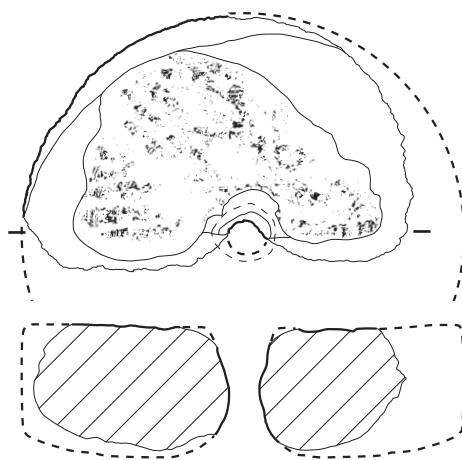
上面の分画数は8分画と推定され、副溝の数は5～6本である。上面の傾斜はほとんどない。下面は、加工に伴う凹凸を多く残す。凸部は、縁から芯棒穴付近まで磨かれてなめらかである。

石材には、長石・石英が認められたが、鉾物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉾物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。色調は灰白

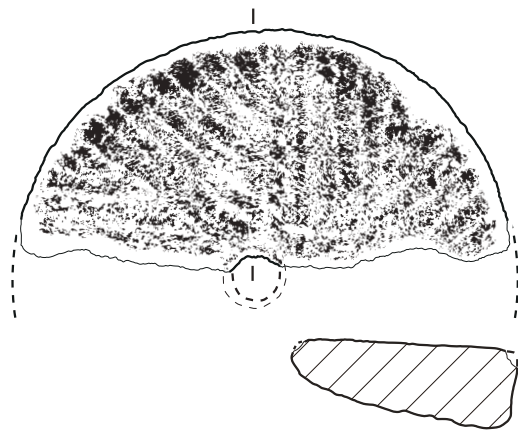
色（2.5Y8/1）である。

石臼13 下臼で、全体の約1/2程度が残存する。復元直径は33.4cmで、高さは5.8cmである。重さは4.50kgを計る。芯棒穴が一部残存し、上面から下面まで貫通している。上面での芯棒穴の直径は4.0cmで、上面から1.2cm下がった部分で直径が2.9cmと最も狭くなると推定される。最も狭い部分から下は、挟られ大きく広がる。下面の縁は少し削り取られ、やや丸い角になる。

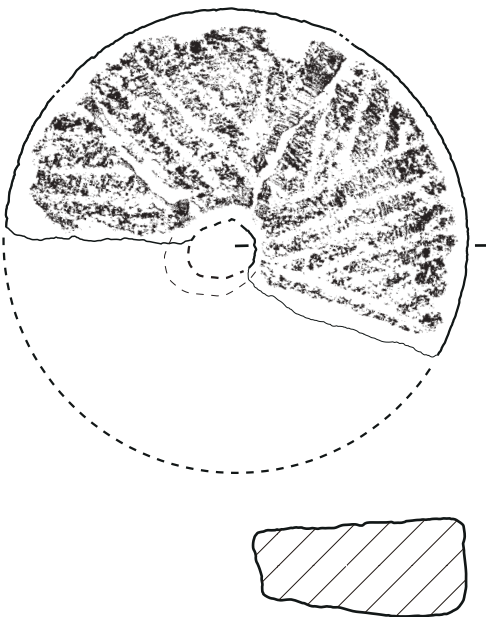
上面の分画数は8分画と推定され、副溝の数は6～7本である。上面は中心から外に向かい傾斜する。下面は、加工に伴う凹凸を多く残す。凸部は、縁から約7.0cmの幅で磨かれてなめらかである。



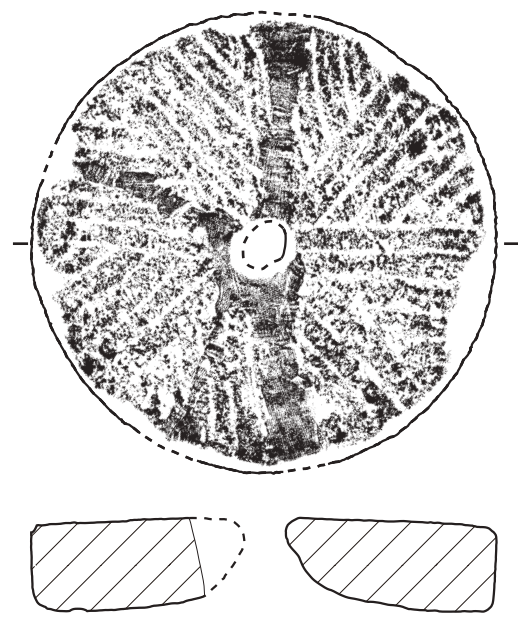
石臼 11



石臼 13



石臼 12



石臼 14

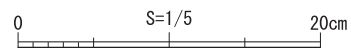


図 10 妙楽寺遺跡出土の石臼

石材には長石・石英が認められたが、鉍物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉍物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。色調は灰白色（2.5Y8/1）である。有色鉍物には、層状の分布が認められた。

石臼14 報告書の第74図 - B203にあたる。包含層からの出土である。下臼で、4個の破片を石膏で接合してあり、ほぼ全体が残存する。復元直径は30.8cmで、高さは6.2cmである。重さは石膏を含んで9.75kgを計る。芯棒穴は、上面から下面まで貫通している。上面での芯棒穴の直径は4.5cmと推定され、上面から1.2cm下がった部分で直径が2.8cmと最も狭くなる。最も狭い部分からは、ゆるやか

に挟られて斜めに広がる。下面の縁はわずかに削り取られ、やや丸い角になる。

上面の分画数は8分画と推定され、副溝の数は4～5本である。上面は内から外に向かい傾斜する。下面は、加工に伴う凹凸を多く残す。凸部は、縁から芯棒穴付近まで磨かれてなめらかである。

石材には、長石・石英が認められたが、鉍物と石基の境界は明瞭に分かれず、等粒状組織を形成している。また、黒雲母と考えられる有色鉍物が認められた。以上のことから、石材は黒雲母花崗岩であると考えられる。長石は石英に比べてやや大きく、有色鉍物は、まばらに分布する。色調は灰白色（5Y8/2）である。

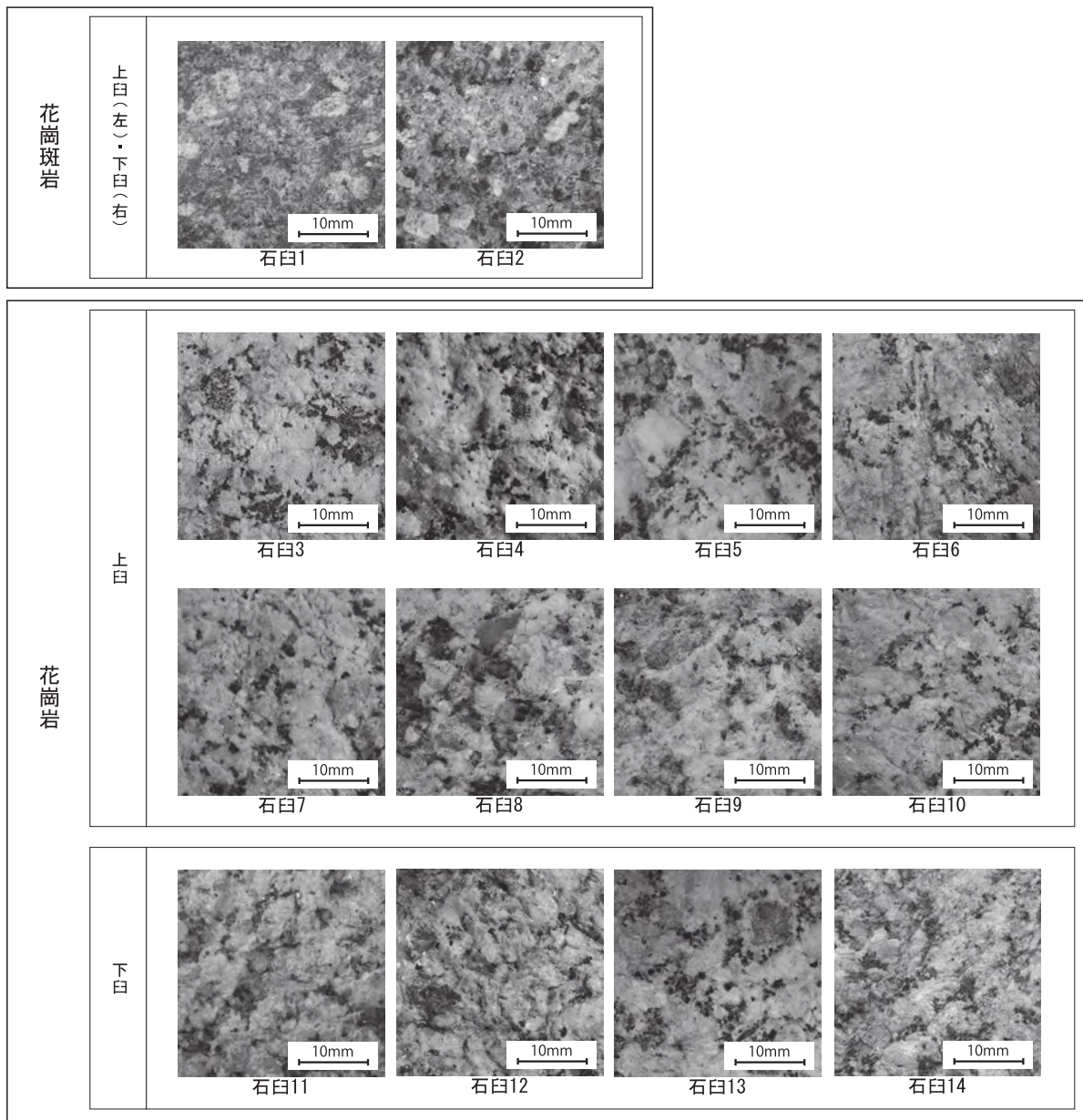


図 11 石材組織

5. 石材の同定

同定の根拠 石材の同定をする上で注目したのは、その組織である。石英斑岩・花崗斑岩と同定した石材には、鉱物と石基の境界が明瞭な斑晶組織が認められた。したがって、結晶と石基の境界が不明瞭な等粒状組織をもつ花崗岩と区別できた。

石材の組織 肉眼観察の記載とは別に、石材の組織を図11に示す。石臼1・2の石材の組織は、斑晶組織をもつ。石臼1の石材には有色鉱物が認められないことから石英斑岩とした。石臼2の石材には有色鉱物が多く認められたことから花崗斑岩とした（両者は岩石の成因が同じで有色鉱物の量で判断しているため、以下花崗斑岩とする）。それ以外の石臼の石材はいずれも結晶と石基の境界が不明瞭な等粒状組織もつことから花崗岩で、黒雲母が認められたことから黒雲母花崗岩（以下、花崗岩と記載）と判断できた。石臼13では、有色鉱物が層状に分布している部分が認められた。他の石臼では、このような組織は認められなかった。

小結 花崗斑岩製の石臼は石臼1・2で、その他は花崗岩製の石臼をみいだした。

6. 石材別形態の比較

分画数 石材の種類によらず共通する形態は、分画数であり、8分画のものが大半を占めた。

花崗斑岩製の形態 上臼は、浅い皿形のくぼみ、平たいふち、楕円形の供給口をもつ。挽き木の取り付け方法は不明である。芯棒受の断面は、先端が丸い三角形である。下臼は、下面の芯棒穴の周辺と縁を大きく抉るため、丸みをおびる。

花崗岩製の石臼 上臼は、浅い皿形のくぼみをもつ点が共通する。縁は、平たいもの、丸いものが認められた。供給口は、長方形・楕円形のものが認められた。挽き木の取り付け方法は、たが締め式である。芯棒受けの断面形は、長方形もしくは楕円形であった。下臼は、下面の芯棒穴の周辺と縁を大きく抉り、丸みをおびるものと、芯棒穴の周辺のみ抉るものがあった。

直径 花崗斑岩製の石臼は、28.5cmとやや小ぶりで、花崗岩製の石臼は、30～36cm程度あった。

小結 石材の違いを超えて、共通する形態の特徴は、分画数・上臼のくぼみの形であった。花崗岩製石臼の供給口に、楕円形・長方形の2形があるのは、先行研究を追認する結果である。花崗斑岩製石臼の供給口は、楕円形であった。これらの特徴のほかに、上臼下面の芯棒受けの形態には、石材別に違いが認められた。これは、芯棒受けが直接芯棒と接するかどうかの違いである。花崗岩製の石臼の場合、芯棒受けと、芯棒のあいだに何らかの部品があったと思われる。

7. 曲谷産石臼、岩倉・長福寺産石臼との比較

曲谷産石臼との比較 比較対象として、小谷城出土の石臼を図12-1・2に示す。これらの石臼は、高橋氏によって報告されたものである（伊吹町教育委員会1994）。氏は、形態の特徴から曲谷産の石臼であると判断し、小谷城の存続期間〔大永四年（1524）～天正三年（1575）頃〕から、この時期に持ち込まれたとしている。

上臼（1）・下臼（2）ともに8分画である。上臼の復元直径は32.5cmとされ、くぼみは浅い皿形で、供給口が長方形、挽き木を取り付ける溝があることから、曲谷産の石臼の特徴を備えている。そのほかに、芯棒受けの断面形は、台形である。下臼の復元直径は、36.8cmで、断面から、芯棒穴の周囲のみ大きく抉る加工がされているようである。また氏は、石材は、全て花崗岩としている。黒雲母が認められると記載されていることから、黒雲母花崗岩と思われる。

まず、妙楽寺遺跡出土石臼のうち、花崗岩製石臼と比較する。上臼については、石臼8・9は、長方形の供給口を備えている。石臼1・4・7は、楕円形の供給口をそなえている。他の上臼は、供給口が残されていないものについては、比較できなかった。下臼については、石臼12・13・14の下面の加工が似る。石臼13では、有色鉱物の連なり（層状の分布）が認められた。

したがって、石臼8・9・13は形態の特徴や、石材組織の特徴から、曲谷産の石臼である可能性が高い。そのほかの石臼の産地については、不明である。

つぎに、花崗斑岩製の石臼との比較検討であるが、前提として、曲谷で花崗斑岩が産出しないという事を確認する必要があった。それについては、踏査をおこない検討した。

筆者は、2014年11月に滋賀県米原市教育委員会が主催した、曲谷白石切り場跡の見学会に参加した。その際に、五色の滝・サナギ谷の石切り場跡を踏査した。これらの石切り場には、江戸時代中頃に石工が進出したとされている（高橋2014）。それぞれの場所で、黒雲母花崗岩の露頭が確認でき、石臼の失敗品・切石・石屑などを実見することができた。また、いずれの場所でも花崗斑岩の露頭・転石は認められなかった。

先に示した生産地の位置図と、この踏査の結果から、曲谷では花崗斑岩が産する可能性は低いと言える。したがって、花崗斑岩製の石臼の産地は曲谷以外に求められることになる。現時点で有力なその他の候補は、岩倉・長福寺である。

岩倉・長福寺産石臼との比較 筆者はまず、2014年9月に岩倉・長福寺周辺の踏査をおこない、地質について調査した。岩倉山中腹には、巨大な転石が多く認められた。転石の新鮮な割れ口を観察すると、大粒の長石・石英の結晶、有色鉱物の結晶が認められ、結晶と石基の境界が明瞭

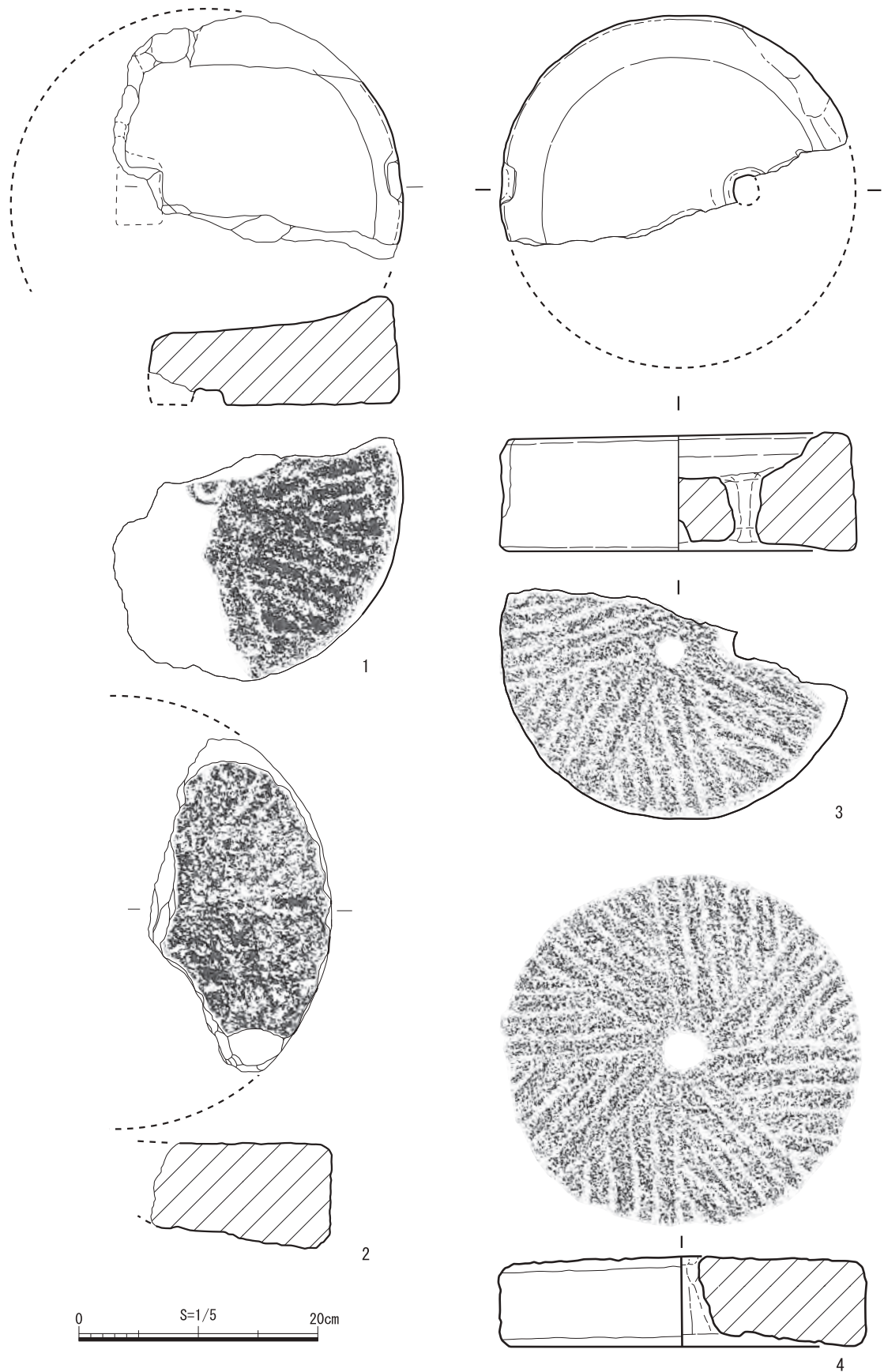


図 12 吉地大寺遺跡・小谷城跡出土の石臼（1・2 小谷城跡、3・4 吉地大寺遺跡）

な斑晶組織を形成していた。この特徴から、花崗斑岩と同定できた。また、矢穴痕の残る花崗斑岩の切石・石屑が大量に放棄されていることから、石工が盛んに採石・製品の加工をおこなっていたことがうかがえた。周辺市街地には、花崗斑岩製石臼の残欠や、未製品と思われる円盤型の石製品も放棄されており、比較的近年まで石臼が生産されていたこともうかがえた。実測調査はおこなっていないため、形態についての比較対象とはできないが、これらの石臼は①8分画、②たが締め式の挽き木の取り付け方法が多い、③直径は30cm以上のものが多い、などの特徴がみてとれた。

岩倉の石工たちは、多くの古文書を残している。それらは岩倉共有文書と呼ばれている。岩倉共有文書のうち寛文四年（1664）の「石うすねたんの覚」には、直径の規格とそれぞれの価格の設定が記されている（近江八幡市史編纂委員会2006）。一尺一寸（約33.0cm）から五分（約1.5cm）きざみで9段階の直径の規格が示されている。妙楽寺遺跡が廃絶されてから60年ほど後の記録なので単純には比較できないが、直径に関する情報としては重要である。

これらを踏まえて、妙楽寺遺跡出土の花崗斑岩製の石臼1・2と比較検討する。直径についての比較にとどまるが、岩倉共有文書に記載される規格の最小値、33.0cmであり、石臼1・2の直径、28.5cmと比べるとかなり小さいことがわかり、岩倉・長福寺産の石臼とするには疑問が残った。このほかに、國分氏が、岩倉・長福寺産の石臼について検討しているため（國分1997）、それらとも比較検討することにした。

國分氏が検討した石臼との比較 國分氏が検討した石臼を図12の3・4に示す。野洲市中主町吉地大寺遺跡出土の石臼である。氏は、出土状況から鎌倉時代～室町時代後期のものとしている。上臼（3）・下臼（4）ともに分画数は、8分画である。上臼については、復元直径は30.0cmで、くぼみはやや深い皿形、供給口は楕円形で、挽き木を取り付ける溝がある。芯棒受けの断面形は先端の丸い三角形である。石材は、「石英・長石の大粒の結晶が目立つ白っぽい花崗岩類」と記載されている。記載を読む限りでは、花崗斑岩のもつ特徴があらわされている。國分氏は、形態の特徴と石材の特徴から、岩倉・長福寺産の可能性があるとしている。

妙楽寺遺跡出土の石臼1・2と、これらの石臼を比較すると、上臼については、くぼみの形、供給口の形、芯棒受けの形態は共通するようであるが、供給口の径はかなり小さい。下臼については、下面の芯棒受けの周囲のみ挟る点も異なっている。

小結 同種の石材を使用している可能性が高い生産地の資料と遺跡出土資料と比較検討をおこなったが、形態・直径などの点に違いが認められた。これらの違いは、時期差・

複数の産地の存在を反映する可能性があるかもしれないが、いずれが妥当か判断することは、現状では困難である。したがって、花崗斑岩製の石臼1・2が、岩倉・長福寺産であるという結論は得られなかった。

8. まとめと今後の課題

以上の検討の結果、石臼が普及し始めた16世紀において、滋賀県で主流である花崗岩製の石臼の他に、花崗斑岩製の石臼をみいだすことができた。石材の違いが産地の違いに直結するとはいえないかもしれないが、少なくとも曲谷産の石臼ではないと思われ、産地に関する新たな知見が得られた。花崗岩製の石臼については曲谷をふくめ、2カ所以上の生産地の存在が示唆された。これに、花崗斑岩製石臼の産地を加えると、16世紀の段階で、少なくとも3カ所の生産地が存在していた可能性がある。また、石材別の割合では、やはり花崗岩が多数を占めている。このことから、この時期において花崗斑岩を材料とする石臼の生産は、まだ低調だったのかもしれない。複数の産地が稼働していたと仮定すると、16世紀後半には、石臼の需要が高まりつつあり、その需要に対応するために、花崗斑岩を材料として新たな生産が開始されたのかもしれない。

妙楽寺遺跡の発掘調査報告書では、中世の妙楽寺遺跡は、軍事・商業・農村の3側面をもっていたとされている（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1989）。特に商業に注目すると、妙楽寺遺跡は、五箇商人のひとつ八坂の拠点に近い。八坂には、若狭などの日本海側からの物資を荷揚げする港があり、街道にも近いことから活発な商業活動がおこなわれていたと思われる。それは、妙楽寺遺跡から出土する輸入陶磁器や茶道具などの多さからみても明らかである。石臼も商人と彼らの活動を擁護した在地領主層の求めに応じて、生産地から持ち込まれたと考えられる。

石臼・茶臼の集成作業を行った國分氏によると（國分1997）、高橋氏のおこなった集成（伊吹町教育委員会1994）と合せて、1997年の段階で、滋賀県内から95点の石臼が出土しているとしている。このうち、妙楽寺遺跡の出土資料は19点を数え、全体の20%を占めている。この事も、妙楽寺遺跡の商業都市・農村としての側面を考える上で重要である。石臼の出土量が、その遺跡の性格をあらわす可能性もある。花崗斑岩製の石臼の分布は、いまだ点である。よって、生産地について検討するには不十分であることは十分に承知している。今後、資料の精査をおこない、面として分布を捉えるとともに、その形態についてもさらなる検討を期したい。

謝辞

本稿執筆に当たりご以下の皆様にご教示・ご指導いただ

きました。記してお礼申し上げます。

梅本匠、高橋順之、辻川哲朗（敬称略、50音順）

註

- (1) 高橋氏は、伊吹町教育委員会1994において、岩倉・長福寺で花崗岩を使用しているとされているが、筆者が岩倉・長福寺の踏査をおこなった際には、典型的な花崗岩の岩体は認められなかった。
- (2) 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2010年版』

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 伊吹町教育委員会（1994）「伊吹町文化財調査報告書第8集」『伊吹町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 近江八幡市史編集委員会（2006）『近江八幡の歴史 第二巻 匠と技』近江八幡市
- 桐山秀穂（2013）「考古学における石臼研究の現状と課題」『私の考古学 丹羽裕一先生退任記念論文集』丹羽裕一先生退任記念事業会
- 國分政子（1997）「中世後期近江の石臼と石工について ―中主町吉地大寺遺跡出土石臼の検討より―」『滋賀考古 第18号』滋賀考古学研究会
- 滋賀県教育委員会（2011）『平成22年度 滋賀県遺跡地図』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1986a）「宇曾川災害復旧助成事業に伴う」『妙楽寺遺跡Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1986b）「宇曾川災害復旧助成事業に伴う」『妙楽寺遺跡Ⅱ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1989）「宇曾川災害復旧助成事業に伴う」『妙楽寺遺跡Ⅲ』

- 高橋則之（2014）「曲谷白石切り場跡」『第102回滋賀県埋蔵文化財センター研究会―最近の発掘調査成果から―土の中から歴史が見える』13平成25年度滋賀県発掘調査成果報告会』滋賀県教育委員会・滋賀県埋蔵文化財センター
- 彦根市教育委員会（1987）「彦根市埋蔵文化財調査報告書第12集」『古屋敷遺跡発掘調査概要報告書』
- 菱田哲郎・野田優人（2013）「曲谷の石臼作りと景観」『米原市東草野の山村景観保存活用事業報告書』滋賀県米原市
- 三輪茂雄（1994）『増補 石臼の謎』クオリ
- 吉田源市、西橋秀海、竹本健一、久田義之、西村貞浩、斎田敏彦、澤田一彦、中村聰志（1991）琵琶湖周辺の花崗岩質岩体『滋賀県自然史』財団法人滋賀県自然保護財団

挿図・表典拠

- 図1 伊吹町教育委員会1994をもとに加藤作成。
- 図2 三輪1994をもとに加藤作成。
- 図3 三輪1994をもとに加藤作成。
- 図4 吉田ほか1991をベースとし、伊吹町教育委員会1994、辻川氏提供の図をもとに加藤作成。
- 図5 国土地理院数値地図25000「能登川」をベースマップとし、遺跡番号・範囲は『平成22年度 滋賀県遺跡地図』にもとづき加藤作成。滋賀県の地図は辻川氏提供による。
- 図6 彦根市「彦根市全図（2）」をベースマップとし、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1989をもとに加藤作成。
- 図7～10 加藤が実測・トレースし作図。
- 図11 加藤が撮影し作成。
- 図12 伊吹町教育委員会1994、國分1997を加藤が再トレース・加筆し作成。

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.28 2015.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages